

プロローグ

廊下の、緑がかった蛍光灯が切れかけていた。もう少しいい場所に研究室を構えれば良かったかもしれないと一瞬考える。綺麗なビルにあれば、その清潔さに紛れて妙な胡散臭さもなくなったかもしれない。まあ、こういう古いビルにあれば目立たないだろうから、そういう意味では正しい選択だったのだろう。

廊下をさらに奥まで進み、アルミサッシのドアノブに手を掛ける。さっきから聞こえていた踏切の警報音は、ドアを閉めると一瞬で聞こえなくなった。部屋に置かれた球体に、ゆっくりと近づく。

頂点からコンピュータに繋いだケーブルは、やはりこの材質で正解だった。情報の読み込み速度の速さという点からもそうだが、何より線として目立たないということが素晴らしい。透明に近く、限りなく細いその線は、側面にたくさんこしらえた丸い窓と合わせて、よりこのマシンの近未来的な要素を高めているようだった。

やはりこういうものを作らねば。つまらないプログラムの解析ばかりやっていた五年前が懐かしい。あの経験があったからこそこうして組み立てることができたのかもしれないが、新しいものを作った今、僕は研究者としてこれまで感じたことのない充実感を覚えている。

被験者の彼女は、どうやら日に日にのめり込んでいっているようだ。何よりもこのマシンを純粹に楽しんでいる。やはり彼女で正しかった。彼女を見ると、僕が作ったものがどれだけ素晴らしいか、それを毎回実感できる。

しかしあのおっさんと会えたことは実に幸運だった。クレール大の教授を通して知ったそのおっさんは、大手町のど真ん中に構えられた、ガラス張りのオフィスの最上階で仕事をしている男だった。僕が想像も出来ないような設備の行き届いたビルを日常にしている男にとって、例えば今僕がいる、こんな建物はゴミ箱以下かもしれない。それを考えると、一度ここに呼んでじっくりこのマシンを見てもらいたくなる。

女子大生と問題を起こす程度の男だ。周りを取り巻く人間の一部をその口封じに使うくらい、何ということもないだろう。もちろん僕はその『問題』の方には、何の興味もないのだが。